# 日隆聖人にみる慈覚大師円仁批判について

米澤立晋

目次

一、問題の所在
二、日本天台教学史上の円仁の評価
三、日隆聖人引用の円仁の著述
（一）『金剛頂経疏』の引用
（二）『蘇悉地経疏』の引用
（三）『法華迹門観心絶待妙釈』の引用
（四）恵心僧都源信撰『教観大綱』の引用
（五）その他著述の引用
四、おわりに
【付表】日隆聖人御聖教引用の円仁の著述一覧

## 一、問題の所在

慶林坊日隆聖人（一三八五―一四六四、以下隆師）の著述は御聖教と呼ばれ、御聖教執筆の根本の態度は、法華経本門八品を主軸とし、日蓮聖人（一二二二―一二八二）遺文を面、天台六大部を裏として天台教学と日蓮教学との相違を明確にしようとしたことが指摘されている。[1] また隆師は、日蓮教学を以て中古天台本覚思想[2]に対する批判を加えていることも先行研究より確認できる。[3]

こうした文献主義・教相重視を強く打ち出した隆師が、日本天台史において天台教学に真言教学を導入し、顕密一致の教判を樹立した諸師を視点とした研究はあまりなされていないようである。[4] しかし隆師の著述を紐解くと、慈覚大師円仁（七九四―八六四、以下円仁）や智証大師円珍（八一四―八九一、以下円珍）といった諸師の著述引用が多数なされていることに気づく。

そこで本稿では、隆師が天台宗延暦寺第三代座主である円仁の天台義をどのように捉え、日蓮教学との相違を明確にしようとしていたのかを確認してみたい。[5] そのための研究方法としては、まず日本天台教学史上の円仁の評価について、先行研究を概観することによってその特質を確認し、次いで隆師が引用する円仁の著述について検討してみようと思う。

## 二、日本天台教学史上の円仁の評価

隆師の円仁批判を考察する前段階として、円仁は日本天台教学史上、どのように評価されているのかを確認する必要があると思われる。そこで、先行研究を概観すると、①島地大等著『天台教学史』、②上杉文秀著『日本天台史』、③浅井円道著『上古日本天台本門思想史』、等を挙げることができる。まずその中で、島地大等氏は以下のように述べている。

而して円仁は既に伝教大師の門下にして止観業の出身なる理由に依りて、其の思想上の立脚地は天台の思想に立てるものと速断することを得ず。勿論其れと密接の関係を有すれども而もその真の立脚地は遮那業に在り、即ち顕教に非ずして寧ろ密教を以て其の立脚となせるものなり。故に其の仏教観を見んには、先づ師が思想上の立脚地の密教にあることを忘るべからず。是れ師が生涯の精力を尽して其の講説に努めたる点の真言に存する所以並に師が台密の祖を以て推さるゝ所以なり。(6)

島地氏によると、円仁は天台の思想に立てることが速断できないとし、真の立脚地は密教にあるとしていることが分かる。そして円仁の仏教観は、生涯精力を尽して真言を取り入れてきたために台密の祖といわれる所以であると結論づけている。

次に上杉文秀氏によると、

慈覚大師の教判は、其の顕露秘密の名は智度論によると雖も、其意は全く異なって居るのである。即ち三乗の権教を以て顕教とし、之に対して一乗円頓の法門を説いた華厳も法華も皆密教と名くといふのである。是故に密教の中に於て、更に理密事密を別ち、事理不二円融の法門を談ずるを理密の教として、此に華厳・法華・維摩等を摂するのである。又其の事理不二の理密を談ずると同時に、六大無碍三密四曼の事相的秘密を説くものを以て、事理倶密の教として、之を一大円教と名けて、大日・金剛・蘇悉地等の経を此中に摂し、

而して之を法華・華厳の円教の上に置いて、仏随自意真実の法門は正に此教にありとするのである。されば顕密の名及び出処は天台と同じけれども、其意義及び配属は全く天台を棄てゝしまってをる、但し法華一乗を理密として密教の部に属せしめたのは、空海師が天台を第八住心として単に顕教に属したものと、大に趣を異にするのである。此点が北嶺の立場であるといはるゝ所以であらう。(7)

とし、円仁の教判は、三乗の権教を顕教とし、華厳も法華も密教の中に入れているとしている。また理密と事密とを分け、法華を理密に位置づけていることが分かる。さらに事理倶密の教えとして、大日・金剛・蘇悉地経等を法華の円教の上に置くことで、真実の法門はこの大日・金剛・蘇悉地経になるとし、顕密の名や出処は天台と同じであるが、その意義や配属は天台を捨て去っていると指摘している。そして、法華を理密として密教の部に属させていることは、弘法大師空海（七七四―八三五）とは違いがあり、この点が天台宗の立場である所以であると推察している。

そして浅井円道氏は、日蓮聖人遺文に円仁が引用されることを指摘した上で以下のように述べている。

日蓮は、円仁の教判論的特色は理同事勝にあると言ったが、その理同とは、一行疏に随って、法華の諸法実相の理と密教の心実相の理、法華の久遠仏と大日の本初仏とは同一教理の異表現であるという判定を円仁が下した、ということを指すばかりでなく、円仁は、顕密兼修の叡山の教風を遵守するために、天台教学によって密教経典を解釈しようと意図した面があることを知らなければならぬ。(8)

浅井氏によると、日蓮聖人遺文にみる円仁の教判の特色は、理同事勝にあるとしている。その理同とは、一行の疏に従って諸法実相の理と密教の心実相の理、久遠仏と大日の本初仏とが同一教理の異なった表現である判定を円仁が下したとするだけでなく、円仁は顕密兼修の比叡山の教風を守るために天台教学によって密教経典を解

釈しようと意図した面があると指摘している。

以上、三師の先行研究を確認してきた。いずれも円仁は天台の密教化に生涯をかけて尽くした人物であるということが理解できる。では、次に隆師は円仁の著述についてどのように捉えていたのかを知るために、隆師が引用する円仁の著述について概観していきたい。

## 三、日隆聖人引用の円仁の著述

前項において、日本天台教学史上における円仁は、天台宗の密教化に尽力した人物であることが確認できた。しかし、円仁が天台宗の密教化を進めることは、天台大師智顗（五三八―五九七、以下智顗）・伝教大師最澄（七六七―八二二、以下最澄）の思想と乖離していくことが推察される。そこで、実際に隆師が円仁の著述をどのように引用しているのかを見ていくことで、隆師の円仁批判を確認していきたい。なお、円仁の著述は散逸して伝わらないものも多く、真偽問題も孕んでいる。そこで本稿では、真偽問題については今後の課題とし、隆師が円仁の著述を引用したものとして考察していきたい。

まず、隆師が引用したと思われる円仁の著述は、管見の限り、『金剛頂大経王経疏』[9]（以下『金剛頂経疏』）一九箇所・『蘇悉地羯羅経略疏』[10]（以下『蘇悉地経疏』）八箇所・『法華迹門観心絶待妙釈』[11]七箇所・『法華本門観心十妙釈』[12]一箇所・『俗諦不生不滅論』[13]五箇所・『妙義口伝集』[14]二箇所・『真言所立三身問答』[15]二箇所・『三平等義』二箇所・『五相成仏私記』一箇所・恵心僧都源信（九四二―一〇一七、以下源信）撰『教観大綱』[16]四箇所・五大院安然（八四一―九〇三―、以下安然）作『真言宗教時義』[17]二箇所・引用典籍不明なものが九箇所・寛平親皇撰『慈覚大

師伝[18]』一箇所の計六三箇所を挙げることができる。また、これらを列挙した【付表】[19]を作成した。本稿ではこの【付表】を元に、隆師の引用が特に多く見られる『金剛頂経疏』、『蘇悉地経疏』、『法華迹門観心絶待妙釈』、源信撰『教観大綱』に注目して隆師の引用箇所を見ていくこととする。

### （一）『金剛頂経疏』の引用

隆師が引用する円仁の著述の中で、最も多いものが『金剛頂経疏』である。『金剛頂経疏』とは、不空三蔵（七〇五―七七四）所釈の『金剛頂経』を釈したもので、古来より台密東密両家の学徒が依憑し尊重していたとされている。また、法華経の久遠実成説とこの経の不久現証説とを通釈して釈迦大日は一仏であるとしており、台密独特の教相を説いていることが指摘されている[20]。隆師が引用する『金剛頂経疏』は、書名のみの引用が五箇所、実際に引用がなされたものが一四箇所（【付表】20を『金剛頂経疏』の引用と認めた場合）、安然作『真言宗教時義』からの引用も一箇所見られる[21]。その中で最も引用が多い箇所は、久遠実成と大日如来を一仏とする「彼法華久遠成仏。只是毘盧遮那仏。不レ可二異執一。又彼経為レ破二三乗近情一。広演二遠事一。今此経為レ破二顕教歴劫一。偏示二不久現証一。」[22]の文であることが分かる。この引用箇所を列挙すると以下の通りになる。なお、番号は【付表】中の番号を指し、【付表】に掲載した箇所については太字傍線を施している。

10　次に彼の真言経には体用本迹の分斉を明して、久遠の本迹を明かさざるなり、其の体用本迹とは、大日経に云く、大日遍照ノ力微塵二為衆生一八相成示二現衆生一同受レ苦云云

此の分の体用本迹をば迹中の諸経に之を明すなり、今経本門には久遠の事の本迹之を明す、之を以て経王

の支証と為すなり、故に彼の真言経の理本と、今経の事本とを同ぜしむるは以ての外の謬解なり、**金剛頂経の疏に云く、彼ノ法華ノ久遠ノ成仏ハ只是レ此ノ経ノ毘盧舎那仏不レ可ニ異解一云云**[23]

11　天台学者の義に云く、顕本に於て事理の顕本あり、理の顕本を以て正意と為すと口伝するなり、理の顕本とは「如来秘密」と云ふ秘密の無作三身たる住本顕本本覚の無作三身本迹未分根本法華の重、止観の本理の三千自受用本覚の顕本なり、此の重の顕本をば顕説法華の本門には之を明さず、唯止観真言のみ独り之を明すなり。

次に事の顕本とは十重顕本の中の破迹顕本の重にして、三乗近成の執を破さんが為めの故に本意にはあらざるなり。之に依て**覚大師の釈に云く、彼ノ法華ノ久遠ハ只是レ此ノ経ノ毘盧遮那仏不レ可ニ異解一　又彼ノ経ニ為メニ破サンカ二乗近情ヲ偏ニ説ニ遠事ヲ。今此ノ経ニ為メニ破サンカ顕教ノ歴劫ヲ示ニ不久ノ現証ヲ**と云へり、顕密一同して近成の執を破して事成の本をば正意とは為さゞるなり。[24]

12　故に天台智者一代諸経の能開所開に就いて三種教相を判じ、此の諸仏の本師の本門妙法蓮華経をば第三教相師弟遠本の重に之を置いて、三千五百塵劫、根本法華を以て能開と為し、第一経王と為す。此の三五遠本の本地を明かさざる真言経、念仏三経等の諸経を以て所開下劣の経と為す。更に第三教相の根本法華の上に最上の大法これなしと定め給ふ。天台、妙楽、伝教の御義を、**慈覚大師より之に背き真言を以て本門の上に置き三種教相の第三の上に真言を置きて、手作りに四種教相を立てて謗法と成り三五の遠塵に迷惑して、結句誹謗を致して、三乗の近情を破さんが為に三五の遠事を説く等と云へり。**此の事は諸人迷乱の重なり云云。[25]

13　事理顕本の中には何れを以て本意と為すやの事。

之に付き、天台当家の不同之れあるべし。然るに天台宗の義に云く、事理顕本の中に事成顕本と云ふは、

十重顕本の中の第一破迹顕本の重にして、迹の近情を破せんが為なり。是れ本意にあらざるなり。故に真実の本と云ふは理成顕本なり。此の理成顕本とは如来内証無作本覚の直体、如来秘密の法体法爾の本有本覚の三身、於諸教ノ中ニ秘シテ之ヲ不レ伝ヘする法界遍照の無始無終の三身なり。是れ住本顕本の重にして、本有本覚たる止観の本理三千己心遍照の一身一念遍於法界の顕本なり。されば先徳云く釈迦如来ノ久遠ノ寿量ハ皆在リ衆生ノ一念ノ心ノ中ニと云へり。是れ理成顕本の体なり。又**慈覚の金剛頂経の疏に云く彼ノ久遠ノ仏ハ者只是レ此経ノ毘盧遮那仏也不レ可異解ス、又彼経ニハ為レ破サンガ三乗ノ近情ヲ仮ニ説ク遠事ヲ此ノ経ニハ破シテ顕教ノ歴劫ヲ示ス不久現証ヲと云へり。**此の文は迹の近情を破する事成顕本は本意にあらず理成顕本を以て正意と為すと云ふ事顕密一同の義なり。されば本門の増損法身の益の時も事成の本より理成の本を以て本意と為すと見えたり。これに依って記の九に云く「若シ但タ只ダ信セバ事ノ中ノ遠寿ヲ何ゾ能ク令メンヤ此ノ諸菩薩等ヲシテ増道損生シテ至ラ於極位一ニ至故ニ信ニ解ス本地ノ難思ノ境智ヲ」と云へり。此等の顕密の大旨を以て理成顕本を正意となすと云ふなり。(26)

14 五百塵点の劫数は実事なり、仮説と云ふは誤りなり。天台宗には両辺なる様なれども、落居は仮説と云ふ義を本と為すなり。所以に顕本の実義と云ふは、如来の内証無作本覚秘密の三身法体法爾の重は、非因非果にして無始無終本有本来の法体として、万法己々法爾として塵々法々に理、智、慈悲の三身を具し、法界遍照して三千依正無作の三身なり。仏と云ふも法界遍照、衆生と云ふも無始久遠なり。故に尊形に顕し修因感果を為すと云ふは始覚なり。久遠とは本覚なり。本覚と云ふは三世遠近を立てず、三世一念にして非近非遠なれば、法界は法性一理にして始めもなく終りもなし無始法爾己己本分にして、唯万法天真として証智円明なり。此れを本覚と云ひ久遠と云ふ。不生を以て久と為すと釈して、万法依正不生なるを以て久遠と云ふ。若し爾らば事成の本に初めあつて又譬に五百塵点と斉限を存せば是れ迹門始覚の法なり。何程久々遠々なり

とも始めあらば始覚仏なり。久遠本覚の仏にあらず。故に経に事成の本をば仮説なりと云て、是我方便諸仏亦然と云て既に方便と云ふ、実事にあらずと聞えたり。事成の本は十重顕本の中の破迹顕本の一辺なり。且らく三乗の近情を破せんが為の故に真実の顕本にあらざるなり。**されば覚大師も彼経ニハ為レ破サンガ三乗ノ近情ヲ仮ニ説キ遠事ヲ此ノ経ニハ破サンガ顕教ノ歴劫ヲ示ス不久現証ヲ と釈し給へり。**此の釈も事成の本は方便なりと見えたり。又智証大師の法華科文に、破シ執スルヲ近情ニ以テ顕ス久遠ノ本ヲ と云へり。是れも五百塵点の遠寿は方便なりと釈し給へり。又天台大師の御釈も、然善男子我実成仏已来と云ふ下は、明シ破シ執ヲ遣ルヲ迷ヲ以テ顕ス久遠之本 と釈し給ひ、此の下に法、譬、合の三文あり。此の文の意は事本の五百塵数は所表の方便なり、無始無終非近非遠無作三身を法文に顕したりと釈し給ひて、事成の本をば是我方便と宣べ給へり。経文、天台の御釈、及び慈覚智証等の御釈悉く事成の五百塵点は方便なり仮説なり、是れ五住煩悩を表示するなり、表示と云ふは仮説なり。[27]

15時節を久遠と云ふは破迹顕本の重なり。是れ真実の顕本にあらざるなり。**覚大師の釈の如く、三乗の近情を破さんが為なり。**真実の顕本と云ふは住本顕本の重にして、如来秘密と云ふ法体法爾無作三身の重の本理の三千是れなり。[28]

16此の久遠の時は教弥実位弥下の大悲なり。**かかる殊勝なる時を三乗の近情を破せんが為なりと一辺に取るは誤りなり。**[29]

17是の故に本門久遠下種の名字・観行の四信・五品の人は、父は大王の中の惣大王の長寿金剛智の下種なる故に退失せざるなり。此の如く三五下種が顕るれば、真言経・華厳経等の得道の地住已上の諸大菩薩の根本種子は過去久遠の寿量品の事三千の妙法蓮華経にあり。故に真言・華厳無得道と云ふなり。此の経王の深義を

顕さんが為に仏は三五塵劫を説きたまへり。之に依て記の四（五〇ウ～五一ヲ）に云く、況ヤ迹化ニハ挙ケ三千ノ墨点ヲ本成ニハ喩タリ二五百ノ微塵ニ本迹ノ事希ナリ、諸教ニ不レ説カ云云。疏の八（一五ヲ）に云く、今法華ハ論スルニハ法ヲ［母］一切ノ差別融通シテ帰ス一法ニ、論スルトキ人ヲ［父］則チ師弟ノ本迹倶ニ皆久遠ナリ、二門悉ク与レ昔反スレハ難レ信シ難レ解シ云云。釈（記十五二ヲ）に云く以テ二乗成仏ヲ為シ心腑ト（諸本、再生改種）（原、符）、以テ顕本遠寿ヲ為ス其ノ命ト云云。されば此の三五遠化の化道の始終・種熟脱を明すことなくんば余経の為に所開となるべく、此の三五下種を明す故に能開と為り、結句真言・華厳等の諸経が無得道と成るなり。

**慈覚大師は此の玄旨に迷惑して金剛頂経疏（巻第三）に彼ノ久遠仏ハ者只是レ此経ノ毘盧遮那仏ナリ、不レ可ラ異解ス、又彼経ニハ為レ破センカ三乗ノ近情ヲ偏ニ説ク遠事ヲ、今此経ハ為レ破サンカ顕教ノ歴劫ヲ示ス不久ノ現証ヲ、等と云て唯だ三乗の近情を破せんが為に三五遠事を説くとばかり意得たるは大僻見なり云云。**[30]

これらの引用文を概観すると、10では真言経には諸経においても明かされる体用本迹を明かしているに過ぎず、久遠の本迹をを明かしていない。そのため、久遠の本迹を明かす法華経本門は経王となる証拠があるとし、真言経の理本と法華経の事本を同じものとみなす証拠として『金剛頂経疏』の引用を示していることが分かる。

11では、天台宗の学者の義として、顕本において事と理の顕本があり、理顕本を正意と口伝している。理顕本とは、住本顕本本覚の無作三身本迹未分根本法華の重であり、止観の根本理法の一念三千自受用本覚の顕本であるとする。この理顕本は顕説法華の法華経本門には明かさず、真言にのみ明かされたものとしている。また事顕本は十重顕本の中の破迹顕本の重であり、始成正覚から久遠実成を明かすためのもので本意ではないとし、その証拠として『金剛頂経疏』を引用し、顕密一同であって久遠実成を正意とする説を論断している。

12では、天台大師が三種教相を立て、諸仏の本師である法華経本門において師弟の遠近不遠近の相を置くこと

で、三千塵点劫・五百塵億点劫の過去の本地を明かすことで第一の経王となる。よって、この三五塵点劫の過去を明かさない真言経や浄土三部経は所開の経となるが、円仁は真言経を以て法華経本門の上に置き、三種教相の第三の上に真言を置くことで手作りの四種教相なるものを立てる根拠として、『金剛頂経疏』を隆師が引用したと思われる。

13では、理成顕本・事成顕本いずれが本意であるかという問いを立て、天台宗の義は、法界遍照無始無終の三身である理成顕本を本意とする。その証文として円仁の『金剛頂経疏』を引用し、迹門の始成正覚を破して久遠実成を明かす事成顕本は本意ではないとし、理成顕本を以て正意とする事は、顕教と密教とが同一の義であるとする。よって法華経本門の増道損生する法身の利益の時も、事成の顕本より理成の顕本をもって本意とすると結論づけている。

14では、当家では五百億塵点劫を実説とするが、天台宗では実説・仮説両説が存在しており、結果的に仮説を採用するとしている。塵点劫が仮説であるため、顕本の真実の姿というものは、非因非果であって無始無終、本有本来の法体として一切の事象の本来あるがままの姿で理、智、慈悲の三身を具足した無作三身である。そうであるならば、仏は法界を遍く照らし、衆生は無始久遠となる。また久遠とは本覚であり、過去・現在・未来の三世の遠近を立てず、三世が一念にして非近非遠であるため、法界は始めも終わりもない本来あるがままの姿で、煩悩のない正しい智恵が円満の状態を本覚や久遠という。もし事成顕本に始めがあり、五百億塵点劫に斉限があるならば始覚仏となり、久遠本覚の仏でなくなってしまう。よって、事成顕本は仮説であり、方便であり、さらには実事ではない必要がある。そのため事成顕本は十重顕本中、破迹顕本の辺であると結論づけている。その証文として、円仁の『金剛頂経疏』、円珍の『法華科文』、天台大師の釈を引用することで、五百億塵点劫の過去は

方便であり仮説であるという説を援用をしていることが理解できる。

15では、時節を久遠というのは破迹顕本のことであり、真実の顕本ではないとし、円仁の釈を引用し真実の顕本は住本顕本であって、「如来秘密」という法体法爾・無作三身の重である本理三千であると天台宗の義を示していることが分かる。

16では、久遠の時というものは、「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」という偉大な慈悲心を与える時である。そのため、久遠というとりわけ勝れた時を三乗の近情を破すために説かれたとする説を採用することは誤りであると主張していることが分かる。

そして17では、法華経に明かされる三五下種が顕されることで、真言経や華厳経による得道の根本種子は、法華経如来寿量品が説く過去久遠の事一念三千の妙法蓮華経に帰結される。すなわち、真言経や華厳経による得道ではなく、法華経の超勝性を明かすために三千五塵点劫・五百億塵点劫を説いている。その証拠として、『法華文句』『法華文句記』等を引用し、法華経は化導の始終・種熟脱を明かすことがなければ所開の経となり、三五下種を明かす故に能開の経となる。その結果、三五下種を明かさない真言経や華厳経は無得道の教えとなる。しかし円仁はこのことを知らず、始成正覚を破して久遠実成を顕すためだけに三五塵点を仮に説くと主張しており、大変な間違いを犯している証拠として『金剛頂経疏』の文を引用していることが分かる。

以上、円仁の『金剛頂経疏』「彼の久遠の仏は只是れ此の経の毘盧遮那仏なり。異解すべからず。又彼の経には三乗の近情を破さんがために仮りに遠事を説く。此の経には顕教の歴劫を破して不久現証を示す。」の引用が見られる八箇所を確認してきた。11―17の文から窺えることは、隆師は法華経の久遠本仏と真言経の毘盧遮那仏を同一とみなすことに対し、強く批判し論断していることが理解できる。それは、智顗・妙楽大師湛然（七一一

―七八二、以下湛然）・最澄と受け継がれてきた教えを、円仁が法華より真言を立てることで天台の教義に違背し、天台宗が謗法の教えへと堕ちてしまったことへの批判と捉えることできる。

さらに、隆師が三五塵点劫解釈の問題について実説を強調する一方、仮説を強調する立場である円仁を批判する根拠として『金剛頂経疏』のこの引用文を意図的に使用していたのではないかと推察できる。なぜなら、円仁は法華経が三五塵点を明かす理由として、ただ三乗の近情を破すために仮に説いたと主張したことに対し、隆師は徹底的に批判していることが窺えるからである。

### （二）『蘇悉地経疏』の引用

隆師が円仁の著述を引用する中で、『金剛頂経疏』に次いで多いのが『蘇悉地経疏』である。『蘇悉地経疏』とは、唐の善無畏三蔵（六三七―七三五）が訳出した『蘇悉地羯羅経』に円仁が注釈を加えたものである。内容は仏部・蓮華部・金剛部の三部法について真言の持誦法則・灌頂・諸曼荼羅などを説明し、妙果を得るための種々の成就法を説いている。[31] 隆師の引用する『蘇悉地経疏』は八箇所確認でき、書名のみの引用が六箇所、引用文として使用している箇所が二箇所、その内一箇所は引用箇所が不明である。また安然作『真言宗教時義』において『蘇悉地経疏』の引用がなされる箇所が一箇所ある。[32] そこで、実際に隆師が『蘇悉地経疏』をどのように引用しているのかを概観すると以下の文を挙げることができる。

25然るに此くの如く迹本両門の希有不思議の易行の三密明明たるを、慈覚大師之を知らずして真言門に移り謗法と成る蘇悉地経等の疏を造り、真言経は事理倶密、法華経は唯理秘密等と謬乱し玉ふなり。[33]

27　凡位聖位即身成仏事

私云覚大師ノ蘇悉地経疏一云、於テ成仏ニ有リ二種ノ義、謂ク凡位ノ成仏、聖位ノ成仏ト云ヘリ此ハ真言秘経ノ意ヲ以テ如レク此ノ判ジテ、凡位成仏ハ真言ノ正意ナル旨ヲ釈シ玉ヘリ、此ノ於テ凡位聖位ノ分別ニ重重ノ意可レシ有レル之云云、天台宗之意ハ三周義ト与ニ即身義ト俱ニ聖位ノ即身成仏、止観ノ六即義ハ凡位即身成仏ト云ヘリ、此ノ凡位ト者名字観行ノ位ナルベシ、初住已上ハ聖位即身成仏也。如レク此ノ天台真言等ニ雖レ分ニ別スト之ヲ、以テ当宗ノ意ヲ見レハ之ヲ、俱ニ聖位ノ成仏也、真実ノ凡位即身成仏ト者本門ニ可レシ明レス之ヲ、本門ハ一向ニ為ニ滅後ノ、故ニ本門ノ正機ハ流通末法ノ凡夫愚人ナルベシ[34]

29此の疏の肝心の釈に云く教ニ有ニ二種一一ニハ顕示教謂ク三乗教ナリ世俗勝義ト未ニ円融一故ニ二ニハ秘密教謂ク一乗教ナリ世俗ト勝義ト一体融スルカ故秘密教ノ中ニ亦有ニ二種一。一ニハ理秘密教、謂ク華厳般若維摩法華涅槃等ナリ但説テ世俗勝義ノ不二一未レ説ニ真言密印ノ事ヲ故ニ二ニハ事理倶密教、謂ク大日経金剛頂経蘇悉経等ナリ亦説キ世俗ト勝義ノ不二一亦説ニ真言密印事ヲ故等云云

釈の心は法華経と真言の三部との勝劣を定めさせ玉ふに、真言の三部経と法華とは所詮の理は同じく一念三千の法門なり、然れども密印と真言等の事法は法華経に闕けてをはせず、法華経は理秘密、真言の三部経は事理倶密なれば天地雲泥なりと書れたり[35]

まず、25の引用は『蘇悉地経疏』の書名のみが見られる。この文によると、法華経迹門・本門の希有で不思議な易行の三密が明らかであるのを円仁は理解せず、真言の教えに移り謗法の書である『蘇悉地経疏』を作成した。そして真言経は事密と理密がともに具備しており、法華経はただ理密のみであるとし、法華経が真言経より劣っているとする主張は誤りであると指摘している。

次に27では、「凡位と聖位の即身成仏の事」と題し、円仁の『蘇悉地経疏』を引用し、成仏において二種類の義があり凡位と聖位の成仏があるとしている。これは真言経の意をもって解釈すると、凡位の成仏は真言の正意であると解釈し、凡位・聖位の違いがあることを心得る必要がある。天台宗の意としては、三周説法（法説周・譬説周・因縁周）による成仏の義と、即身成仏の義は共に聖位の即身成仏の義であり、止観の六即（理即・名字即・観行即・相似即・分真即・究竟即）の義は凡位の即身成仏とする。この凡位とは名字即・観行即の位であり、初住以上の位は聖位の即身成仏である。天台宗・真言宗等では、凡位・聖位の即身成仏を分別して捉える一方、法華宗は凡位・聖位の成仏は共に聖位の成仏になるとしている。よって真実の凡位の即身成仏とは、法華経本門に開顕されたもので、本門は一向に滅後の為にある法門である。なぜなら、本門において正しく仏の教法を受け入れるべき機根は、流通末法の凡夫であり愚人であるためであると主張している。

そして29では、安然の『真言宗教時義』において安然が円仁の『蘇悉地経疏』の肝心釈を引用し、台密の立場より法華と真言の比較をしている。この引用文を解釈すると、教には顕示教と秘密教があり、顕示教は三乗教であるが、世俗諦（世間一般に認められている道理のこと）と勝義諦（世俗の真理に対する出世間の真理のこと）とが円融することができないとする。また、秘密教とは一乗教であり、世俗諦と勝義諦とが一体となるために、秘密教の中にもまた二種類ある。一つ目は理秘密教といい、華厳・般若・法華・涅槃等を指し、世俗諦・勝義諦の不二を説くが、真言密印の事を説いていない教えである。二つ目は事理倶密教といい、大日経・金剛頂経・蘇悉地経等を指し、世俗諦と勝義諦の不二を説き、さらには真言密印の事も説くものであると解釈できる。隆師は『蘇悉地経疏』の解釈の心として、法華経と真言の三部経との勝劣を定めるためのもので、真言の三部経と法華経は、所詮の理は両者とも一念三千の法門である。しかしながら、密印と真言等の事相の法は、法華経には欠けて存在

しておらず、法華経は理秘密、真言の三部経は事理秘密の教えであるため雲泥の差があるとしており、台密の立場では法華経より真言三部経が勝れている証文として引用していることが理解できる。

これら『蘇悉地経疏』の引用から理解できることとして、隆師は法華経が真言経より劣っているとする説の根拠として、①理密・事密の問題、②凡位・聖位の成仏の問題、③顕示教・秘密教の問題等において視点を当て解釈を加えていることが分かる。すなわちこれらの問題について、法華経の超勝性を示すための比較対象として、円仁の『蘇悉地経疏』を引用していると推察される。

### （三）『法華迹門観心絶待妙釈』の引用

次に『法華迹門観心絶待妙釈』の引用が見られる箇所は七箇所であり、いずれも同一箇所からの引用であることが分かる。『法華迹門観心絶待妙釈』の内容としては、法華玄義迹門十妙の観心釈であるとされている。[36] そこで実際に隆師が引用する箇所を確認していくこととする。

30　**されば慈覚の御釈、迹門観心妙と云う文に、「法華宗に四智を立つとは、大円境智・平等性智・妙観察智・成所作智、真言・天台に五智を立つとは、法界体性智は中道遮照境を縁ず（後略）」と云えり。**この文分明なり。纔（わずか）に法華宗と云う分は、猶中道智、法界体性智を明かさず、四智空仮の分斉を明かす。恐らくは別門に同ず。「四智心品は所依常なるが故に」の宗旨なり。尤も、法華宗を捨てて天台宗の分に就きて、止観根本法華、本迹未分、二夜不説の秘密甚深の極理を解行して、天台宗に入るべしと云う釈義なり。仍って法華宗と云う辺は、傍依の方便なり、天台宗と云う分は、正依実説の宗旨なり。この天台宗の重と真言宗の

重とは合同なり。「故に真言・天台に五智を立つる」とは判ずるなり。又真言宗と法華宗とは大に勝劣これあり。故に天台宗には、慈覚より已来、天台止観をもって真言に同じ、顕密一致の天台宗を弘通するなり。[37]

32 次に覚大師の四智五智の釈に至っては、この事は大謗法、大邪見、大僻見の虚言を云い出だしたるなり。この文は慈覚の御釈、迹門観心妙と云う文にこれあり。この正本は「法相宗立四智者」とあるを、「相」の一字を虫の噉いてこれあるを押して、「華」の字なりと移し取って、世に流布の要文集に「法華宗立四智者」と書き付けて、法華宗は劣り、天台宗は勝ると云いて、法華経を捨てて真言に同じ、真言止観同と云う事を云うなり。かかる虚偽を云い出だす者の、忽ちに堕獄せざるは不思議なり。この事余りに不審なるに依っての故に日存聖人は縁を取って直ちに彼の所に行きて、慈覚大師の御経蔵の正本を披覧あれば、法相宗の相の字を虫の噉ってある事は疑いなきなり。然るに、その前後に明らかに法相宗とこれありと仰せらるる事を、直ちに聴聞仕り畢ぬ。[38]

36 日存聖人の仰せに云く、我山門に登山の時、不思議の縁に依り山上の御経蔵の正本の迹門観心絶待妙の直本を見るに、法相宗立四智者と書かれたる相の字をむしがくうて候を、前後を能くく見れば法相宗に四智を立つと釈せられて候を、余りに止観・法華の勝劣を言ひたがりて相の字を華の字にてありと虚言して一天下の諸本に法華宗と書きて諸人を謗法と成すなり。[39]

これらの文を確認すると、30では円仁の『法華迹門観心絶待妙釈』に、法華宗では四智（大円境智・平等性智・妙観察智・成所作智）を立てることに対し、天台宗・真言宗では法界体性智を加えた五智を立てるとした引用が見られる。法華宗では、猶中道智や法界体性智を明かさず、四智は空諦・仮諦を明かすとし別門と同様であるとしている。また、法華宗を捨てて天台宗に就くことは、止観を法華経本門・迹門の教相を超越した本迹未

分・内証不思議の重として立て、二夜不説の秘密甚深の極理を理解・修行して天台宗に入るべきであるという解釈である。これに依るならば、法華宗は傍依の方便であり、天台宗は正依実説の宗派であると判じることができる。また、この天台宗と真言宗の重は同一とみなし、それは「真言・天台に五智を立てる」と判じていることからも分かる。また真言宗と法華宗とは大いに勝劣があり、天台宗には円仁以来、天台止観をもって真言と同じとみなし、顕教と密教が一致した天台宗を弘通していると批判していることが理解できる。

一方、32 36では円仁の四智五智の解釈について、大変な誤りが存在しているとしている。『法華迹門観心絶待妙釈』の正本では「法相宗立四智者」とあるのを、世に流通している要文集では「法華宗立四智者」と書き換えて法華宗は劣り、天台宗・真言宗は勝れていると主張している。このような解釈が起こる原因として、日存（一三六八―一四二二）が円仁の経蔵の正本を披見された際、法相宗の「相」の字が欠けていたことを隆師は聞き及んでいたことが分かる。それは当時、止観と法華の勝劣を主張せんがために、これらの諸本を採用している状況に非常に憤りを感じていることが窺える。

隆師は、「法華宗立四智者」の文をそのまま解釈し、天台宗・真言宗が勝れ、法華宗が劣るとする主張に対し批判を加えている視点と、「法相宗立四智者」の文を「法華宗立四智者」と改竄し、止観と法華の勝劣を加える当時の先師について、徹底的に批判している視点があることが理解できる。

### （四）恵心僧都源信撰『教観大綱』の引用

隆師が円仁の文を引用する際、円仁の著述を直接引用することが殆どである。しかし、円仁の著述には確認で

きず、他の先師の著述から円仁の説として引用していると思われる箇所が存在する。先に触れた【付表】19 29安然作『真言宗教時義』の他には、源信撰『教観大綱』を挙げることができる。この『教観大綱』の引用は【付表】50―53の四箇所確認できる。ただ51 52では、「無作三身は寂光土に住す。」と引用する箇所において「円仁云く」等といった文言が存在せず、隆師が円仁の文として引用したかどうかは不明であるため紹介に留めておくこととする。また、隆師がこの引用文を採用している著述は『開迹顕本宗要集』だけであることも注目できよう。『開迹顕本宗要集』は、天台宗の宗要を隆師が当宗の立場より解釈を加えたもので、50では、「他受用応化身は寂光土に遍するやの事[40]」と題した問いに対する答えの一つとしての引用が見られる。

50覚大師は無作三身ハ住ニス寂光土ニ一と釈し給へり。既に十界三千万法寂光土にあり凡聖本有常恒なり。何ぞ他受用応化身は遍せずして之を闕くべきや[41]。

隆師は他受用応化身は寂光土に遍くとした立場より、円仁の「無作三身は寂光土に住す。」という文を引用し、その上で、

今は何にも本門寿量の無作三身の上にて寂光に遍すると遍せざるとを論ずべきものなり云云[42]。

と述べ、本門寿量品の無作三身の上において寂光が遍するか否かを論じなければならないと注意を促している。次に53では、「無作三身共に虚空を座と為し、寂光土に居するや[43]。」という問いを設け、天台宗の義として円仁の説を引用している。

53天台宗の義に云く、教門の所談には三身四土能居所居差別して之を論ずと雖も、今経開顕の実義顕れば三諦三観円融して三千万法一念に居し、三身四土互具相即して無作三身の覚体顕れ、虚空為座して常寂光土に居すと云ふ事、宝塔品已下の儀式に分明なり。（中略）如之、覚大師云く、無作三身住ニシ寂光土ニ一三眼三智ヲ以テ知ニ

見ス九界ヲ云云。此等の文理顕然なり。(44)

この文によると、天台宗の義では、教相門を論談するには三身四土（凡聖同居土・方便有余土・実報無障碍土・常寂光土）、能居所居を区別して論じなければならない。しかし、法華経開顕の実義が顕われれば、三諦（空諦・仮諦・中諦）三観（従仮入空観・従空入仮観・中道第一義観）は円融し三千万法が一念に居し、三身四土も互具相即して無作三身の覚体が顕われ、虚空を座となして常寂光土に居す。この事は、宝塔品以下の儀式に明らかであるとしており、その論を補強するために円仁の説を引用していることが分かる。

一方、隆師は三身において本迹の不同があるとしている。

迹門の意は法身実相の辺は開権顕実する間爾前と異なりと雖も、報応果頭開顕を明さざる辺は爾前と之れ同じ。疏の九、記の九に迹門義同と釈せり。されども法身所依常に約して相即三身を明す。相即三身の辺にて虚空為座常寂光義を宝塔品よりこれを明かす。(45)

まず迹門の三身の意としては、法身実相の辺において開権顕実する間は爾前経とは異なるといえるが、報身・応身の果頭開顕を明かさない辺においては爾前経と同じであるとしている。しかし法身を依り所に約すと、相即三身を明かすということになり、相即三身の辺において見れば、虚空を座となし常寂光の義を宝塔品以下において明かしたということになる。

本門八品を説いて要を以て上行に付し、本涅槃妙滅後下種唱導に譲与す。此の如き教弥実位弥下の無作三身、教弥実位弥下の事の虚空を座と為し、教弥実位弥下の事寂光本国土妙に住し、易修易行の事行の妙法蓮華経を以て末世の悪人に授け、知らず覚らず即身成仏して証道八相を唱へて無作三身の覚位に居し自然に虚空為